

カイルス山・マナサロワール湖周辺から流出する 四大河の伝統的水源

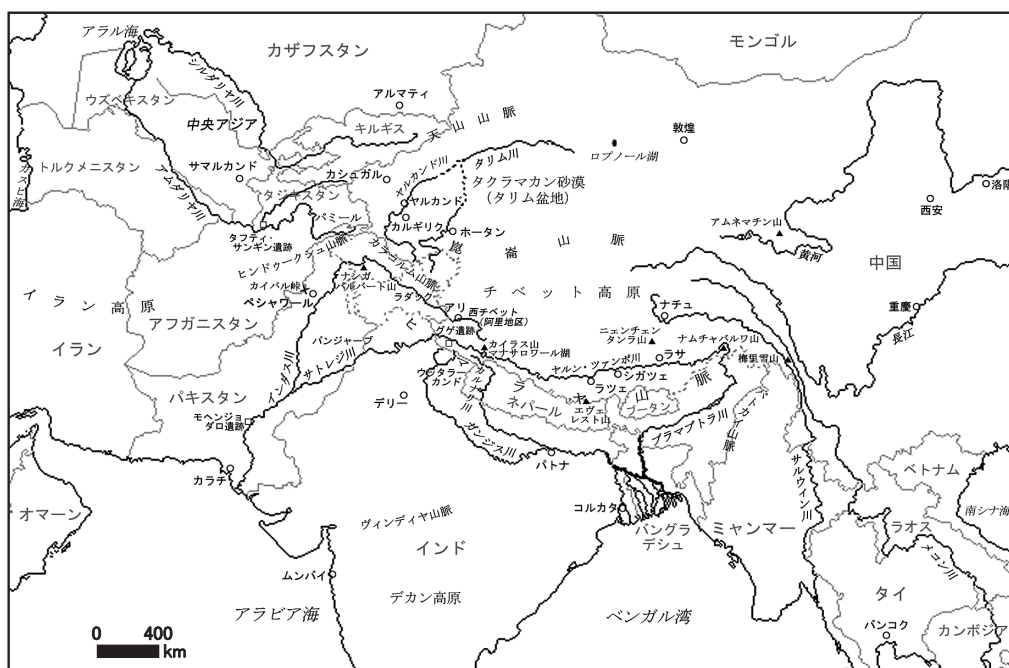
友 井 一 公*

I. 序 論

本稿の対象地域は、広大なチベット高原の極西部を占める西チベットである。古来チベット語で「ンガリ (mnga'ris)」と呼ばれ、

現在の行政区域では中国チベット自治区阿里地区が概ねこれに該当する(第1・2図)。

西チベットでひとときわ目を引く存在が、モニュメントの如く大地に屹立するカイルス山(第3図)と、紺碧の湖水を湛えたマナサロ

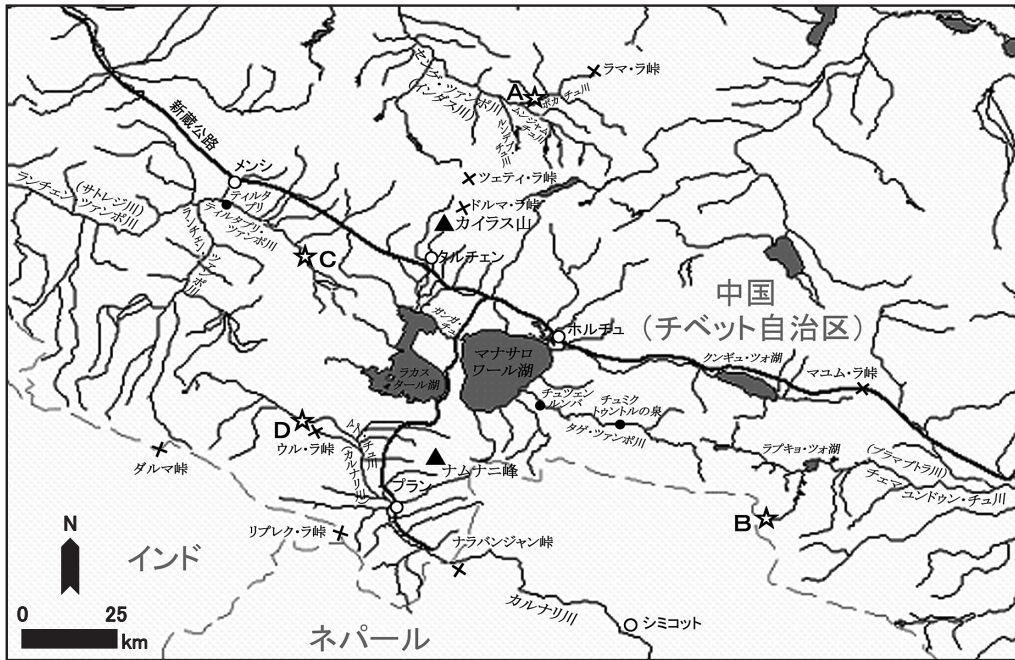


第1図 西チベットおよびインド亜大陸とその周辺
世界地図フリーソフトウェア MERCATOR を利用して作成。

* 立命館大学文学部・卒

キーワード：西チベット、四大河、伝統的水源、須弥山世界、巡礼案内書

Key words : West Tibet, Four Great Rivers, Traditional Source, World with Mt. Sumeru, Pilgrimage Guide



☆ 四大河の伝統的水源：A＝センゲ・カンバの泉 B＝タムチョク・カンバ・チョルテン
C＝ランチェン・チュンゴの泉 D＝マプチャ・チュンゴの泉
●：その他の泉や温泉 ○：おもな町と集落 ×：おもな峠

第2図 西チベット核心部 世界地図フリーソフトウェア MERCATOR を利用して作成。



第3図 カイラス山

2006年10月31日筆者撮影。内環巡礼路から南面を望む。



第4図 マナサロワール湖

1999年11月13日筆者撮影。西岸からカイラス山を望む。

ワール湖（第4図）である。両者の存在感は圧倒的で、チベット高原やインド亜大陸の人々が信仰する四つの宗教の非常に重要な聖

地となっている。四つの宗教とは、インドからチベットに伝来した仏教（一般に「チベット仏教」と呼ばれる）、仏教の伝来以前からチベットに広まっていたボン教、インド最大

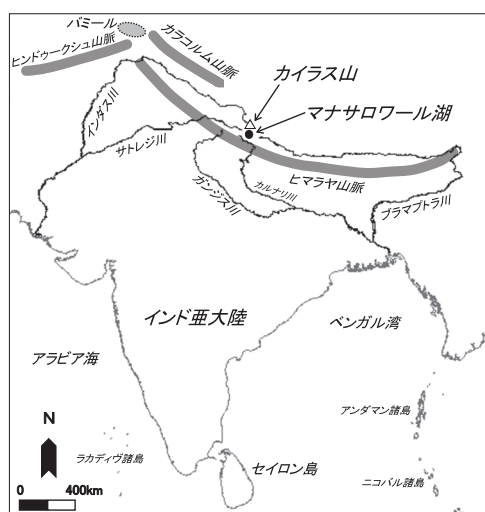
の宗教のヒンドゥー教、西インドに広まったジャイナ教である。これらの各宗教は、それぞれがカイラス山・マナサロワール湖にまつわる神話や伝承を有している¹⁾。また、いずれの信者も、この聖なる山と湖に赴いて参拝する聖地巡礼の旅を願ってやまない。

1990 年以来、筆者もたびたび西チベットを訪れ、巡礼者の一人としてカイラス山やマナサロワール湖の巡礼路を歩いた。また、回を重ねて周辺の遺跡や洞窟、温泉等も訪ね歩くようになると、西チベットの山河に聖性をもたらす様々な要素が垣間見えるようになってきた。その一つが、カイラス山・マナサロワール湖周辺からインド亜大陸を潤す四つの大河（インダス川、サトレジ川、カルナリ川、ブラマプトラ川）が流出する、地理的特異性である（第1・2・5図）。このうち、カルナリ川はガンジス川の主要な支流で、かつてはこの川をガンジスの主源流とする見方もあっ

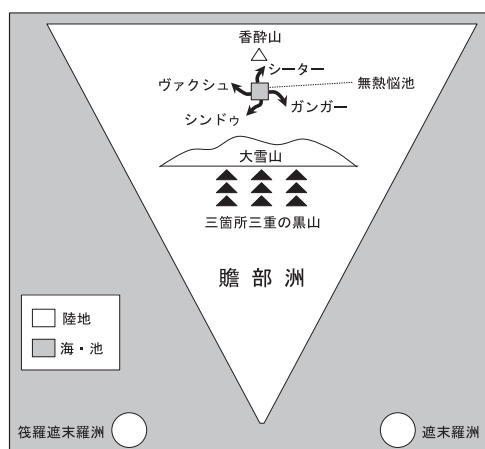
たという²⁾。そして、これら四大河の源流には、各大河の水源として伝統的に神聖視されてきた泉が存在する。筆者も遙かな大河の源に魅せられ、1999 年から 2007 年にかけて各水源に到達した。

カイラス山・マナサロワール湖周辺から流出する四大河の伝統的水源は、いずれも流路の源頭（最奥地点）には位置していなかった。したがって、現代の国際的な基準でみれば、その大河の水源には該当しない。しかし、この場所こそが大河の源に相応しいと誰もが納得するような、特別な佇まいが感じられるロケーションであった。

いっぽうで、四大河の伝統的水源は、仏典（仏教の経典）やマンドラ³⁾との間に関連性が認められ、宗教的に意味づけされている。具体的には、各水源はそれぞれ獅子・象・馬・孔雀の口に喩えられるが、これらの動物は金剛界マンドラにおける金剛界五仏の乗物（獅子・象・馬・孔雀、金鳥）にすべて含まれる⁴⁾。また、「ヒマラヤ山脈の北側、カイラス山・マナサロワール湖周辺から四大河が流出する」という西チベットの山河の地理的位置関係は、仏典に説かれた須弥山世界の描写とよく似ている。須弥山世界とは、古のインド人が考えた世界の姿である。仏典の中でも『阿毘達磨俱舍論』⁵⁾の須弥山世界には、「大雪山の北、香醉山の南に無熱惱池があり、池から四大河が流れ出る」という構図が含まれ、これが西チベットの山河の地理的位置関係を想起させるのである（第5・6図）。ただし、無熱惱池から流れ出る四大河の名称には、インド亜大陸の大河（ガンガー、シンドゥ）と共に中央アジア方面の大河（シーター、ヴァクシュ）も含まれる。そうでありながら、チベット仏教の巡礼案内書⁶⁾には、



第5図 西チベットの山河とインド亜大陸の地理的位置関係
世界地図フリーソフトウェア MERCATOR を利用して作成。



第6図 『阿毘達磨俱舍論』の須弥山世界(瞻部洲)
定方辰 (2011)『インド宇宙論大全』、春秋社、217
頁、図20を加筆修正して作成。

カイラス山・マナサロワール湖周辺から流出してインド亜大陸を潤す四大河(インダス川、サトレジ川、カルナリ川、ブラマプトラ川)と、無熱惱池から流れ出る四大河(ガンガー、シンドゥ、シーター、ヴァクシュ)が、渾然一体化したような記述が認められる。

本稿では、カイラス山・マナサロワール湖周辺から流出する四大河の伝統的水源について、実際に訪れてみた水源のロケーションと、当該地点に認められる宗教的な意味づけの両面から検討する。

まずⅡ章では筆者の記録をもとに、四大河の伝統的水源の現地状況を報告する。次にⅢ章では、西チベットの山河(カイラス山・マナサロワール湖とその周辺から流出する四大河)と仏典の須弥山世界の描写を照合し、両者の関連性を確認する。さらにⅣ章では、チベット仏教の巡礼案内書に注目し、四大河の伝統的水源に関する記述を抽出する。そして、チベット仏教の巡礼案内書の記述=チベット人の宗教的な地理観において、四大河の伝統

的水源がどのように認識されているのかを検討する。以上を総合し、本稿では、カイラス山・マナサロワール湖周辺から流出する四大河の伝統的水源の実相を明らかにすることを目的とする。

Ⅱ. 四大河の伝統的水源の現地報告

1. インダス川水源：センゲ・カンバの泉

インダス川(チベット名: センゲ・ツァンポ川)の水源とされるセンゲ・カンバの泉は、カイラス山の北東に位置する(第2図、図中の☆A)。「センゲ」はチベット語で「獅子」、「ツァンポ」は「大きな川」を意味する。したがって、「センゲ・ツァンポ」は「獅子の川」である。また、「カンバ」は「口から出てくる」なので、「センゲ・カンバ」は「獅子の口から流れ出る」になる。

現地の標高は約5,100～5,200mで、緩やかな丘の裾部に岩場があり、その下端から水が勢いよく湧出する(第7図)。流れ出た水は岩場の数十m先でタルチョ(青・白・赤・緑・黄の五色の祈禱旗)の架けられた2本の旗竿の間を通過するので、そこがゲートのように見える(第8図)。初冬の高原は既に茶枯れ



第7図 センゲ・カンバの泉①
1999年10月26日筆者撮影。



第8図 センゲ・カンバの泉②

1999年10月26日筆者撮影。湧出口の岩場から下流を望む。岩場の上にはマニ石が見える。

ていたが、白い岩場と澄んだ水はとても美しく、「獅子の口」と呼ぶのに相応しい佇まいであった。岩場の上にはマニ石（真言や仏画を彫刻した石・岩）や動物の角が積まれ、そこがチベット人にとって聖地であることを示していた。

泉の水は岩場から数百m流れ、ボカ・チュ川（インダス川の源流）の右岸に流入する。しかし、ボカ・チュ川の河床は、泉の水の流入点よりもさらに上流へ、湿地状になりながらも続いていた。したがって、センゲ・カンバの泉はボカ・チュ川の流路の源頭（最奥地点）にあるわけではない。

2. ブラマプトラ川水源：タムチョク・カンバ・チョルテン

ブラマプトラ川（チベット名：ヤルン・ツァンポ川）の水源とされるタムチョク・カンバ・チョルテンは、マナサロワール湖の南東に位置する（第2図、図中の☆B）。「タムチョク」は「天上の馬」や「馬の耳」を意味するという⁷⁾。「カンバ」は「口から出てくる」なので、「タムチョク・カンバ」は「天上の馬の口から流れ出る」あるいは「馬の耳から流れ出る」であろう。また、「チョルテン」は仏塔ないしそれに類するモニュメントなので、そこに



第9図 タムチョク・カンバ・チョルテン
2006年10月2日筆者撮影。

は仏塔等のモニュメントが建っている。

現地の標高は約5,100mで、チェマユンドゥン・チュ川（ヤルン・ツァンポ川の主流）の左岸に高さ約3mの巨石があり、その上部に石積みのチョルテンが建てられている（第9図）。チェマユンドゥン・チュ川は、チョルテンよりもさらに奥のタムチョク・カンバ氷河から流出する。また、チョルテンの少し下流でチェマユンドゥン・プゥ氷河が右岸に合流する。Pranavānanda⁸⁾の1937年当時の記述によると、二つの氷河が馬の耳、チョルテンの建つ巨石近くの泉が馬の口に当たり、泉は夏と雨季には水を湛えるという。しかし、筆者の訪問が10月初旬だったためか、巨石の直近に泉は見当たらなかった。チョルテンのおよそ100m下流に湧水があったものの、それがPranavānandaの「巨石近くの泉」かどうかは不明である（第10図）。

3. サトレジ川水源：ランチェン・チュンゴの泉

サトレジ川（チベット名：ランチェン・ツァンポ川）の水源とされるランチェン・チュンゴの泉は、マナサロワール湖の北西に位置する（第2図、図中の☆C）。「ランチェン」は

チベット語で「象」、「チュンゴ」は「水源」を意味する。したがって、「ランチェン・チュンゴ」は「象の川の水源」になる。

現地の標高は約 4,500 ～ 4,600 m で、南東～北西方向にひらけた広い谷に湿地が形成され、湧水が溢れていた。ランチェン・チュンゴの泉は湿地の端に位置し、タルチョの架けられた 2 本の旗竿が目印となっている（第 11 図）。すぐ北側の丘の麓にはドゥルチュ・ゴンパ僧院が建つ。この僧院の背後の丘が象の姿をしているという⁹⁾。



第 10 図 チョルテン近くの湧水
2006 年 10 月 2 日筆者撮影。タムチョク・カンバ・チョルテンの約 100 m 下流。泉から湧出した水がチェマユンドゥン・チュ川の河床に流下する。



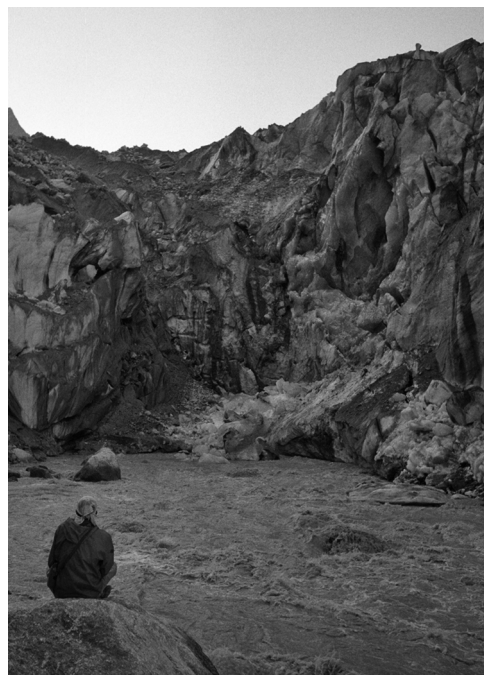
第 11 図 ランチェン・チュンゴの泉と湿地
2006 年 10 月 17 日筆者撮影。2 本の旗竿に架かるタルチョの下に泉がある。

ランチェン・チュンゴの泉は石で囲まれ、水面は井戸のように静かであった。ただし、湿地全体の湧水と合わせてみれば、豊かな水量が感じられる。この湧水が茶色く濁った支流に流れ込み、さらに下流でランチェン・ツァンボ川（サトレジ川）の源流であるティルタプリ・ツァンボ川に合流する。

4. カルナリ川水源：マプチャ・チュンゴの泉

カルナリ川（チベット名：マプ・チュ川）の水源とされるマプチャ・チュンゴの泉は、マナサロワール湖の南西に位置する（第 2 図、図中の☆ D）。「マプチャ」はチベット語で「孔雀」、「チュンゴ」は「水源」を意味する。したがって、「マプチャ・チュンゴ」は「孔雀の川の水源」になる。

一般に、ガンジス川の主源流は、インド共



第 12 図 ゴームク
2000 年 5 月 23 日筆者撮影。氷河の舌端からパーギラティー川（ガンジス川の主源流）が流出する。標高約 4,000 m。

和国ウッタラーカンド州のゴームク¹⁰⁾から流出するバーギラティー川（第12図）とされている。第1図において、ガンジス川最上流部の左俣がバーギラティー川である。しかし、かつてはカルナリ川をガンジス川の主源流とする見方もあったという。

現地の標高は約4,300～4,400 mで、河岸の崖の中腹から勢いよく水が湧出している。その水が河床に流れ落ちるところに大きな苔のドームが形成され、水はドームの表面や内側を流れる（第13図）。一説によると、苔の緑色が孔雀の首の色に似ているゆえに、「マブチャ・チュンゴ（孔雀の川の水源）」と名づけられたという¹¹⁾。確かに、苔のドームの美しさも、泉の水量の豊富さも、カルナリ川ひいてはガンジス川の水源に相応しい佇まいであった。ただし、泉の湧出地点では、マ



第13図 マブチャ・チュンゴの泉
2007年7月9日筆者撮影。崖の中腹の湧出口にはマニ石が置かれ、タルチョも架けられていた。

ブ・チュ川の河床は依然として幅広く、流路はさらに上流へと続いている。

5. 四大河の伝統的水源の特徴

（1）現代の国際的な水源の基準には該当しないロケーション

中村¹²⁾によると、河川の水源確定の国際的な基準は、①水源最奥原則＝最長の支流にある源頭が正式な水源、②水量最大原則＝水量が最大の支流にある源頭が正式な水源、③川の流れの主方向に一致した支流の源頭が正式な水源、の三つである。この国際的な基準に該当する地点は、本稿で報告した四大河の伝統的水源には見当たらない。いずれの水源も流路の源頭（最奥地点）には位置しておらず、それよりも手前の泉である。しかし、それぞれの泉において、澄みきった水がこんこんと湧出する様相は、清浄感と生命力に溢れ、訪れた者に強い印象を与える。

古来、人々に恵みをもたらし、その流域に文明を育んできた大河は、聖なる存在となった。インドでは、聖地を表す「ティールタ（tirtha）」という言葉が、もともと「川の浅瀬」を意味していたほどである¹³⁾。インド人は、ガンジス川など特定の大河の水辺で沐浴することによって穢れを洗い流し、精神的に再生する。そのような存在である大河の源＝水源は、地上に湧出した水の清浄感や生命力、さらには到達が容易でないことも相まって、ひとときわ神聖な聖地になったと考えられる。

したがって、水源を求める基準は、この場所こそが大河の源に相応しいと誰もが納得するような佇まい、そこで得られる強い印象が重要だったであろう。そうであればこそ人々の心を惹きつけ、聖地として認められたと考えられる。

(2) 仏典ゆかりの動物との関連性

カイラス山・マナサロワール湖周辺から流出する四大河の伝統的水源は、いずれも動物の口に喩えられ、インダス川＝獅子、サトレジ川＝象、ブラマプトラ川＝馬、カルナリ川＝孔雀であった。この四大河の伝統的水源の動物と合致もしくは類似する動物の組み合わせが、仏典やマンダラにも認められる。例えば、密教經典の『金剛頂經』¹⁴⁾に説かれ、大日如来の智恵の働きとそれに基づく悟りの世界を圖像化した金剛界マンダラは、中心の大日如来の四方に、阿閼如来、宝生如来、阿

弥陀如来、不空成就如来^{ふくこうじゅうじゆ}が配され、それぞれ動物に乗っている。具体的には、大日＝獅子、阿閼＝象、宝生＝馬、阿弥陀＝孔雀、不空成就＝金鳥で、四大河の伝統的水源の動物（獅子、象、馬、孔雀）がすべて含まれる¹⁵⁾。

また、須弥山世界について詳しい内容を有する仏典・文献には、無熱惱池の四面の獣口から四大河（ガンガー、シンドゥ、シーター、ヴァクシュ）が流れ出るという記述が認められ、獣口の動物は、獅子、象、馬、牛である（第1表）¹⁶⁾。朴¹⁷⁾は、このような四大河の流れ出る獣口について、古代インドの聖な

第1表 須弥山世界の瞻部洲内部の描写（仏典別）

仏典名（成立年代）	瞻部洲の内部における 無熱惱池の位置	無熱惱池から流れ出る四大河 (池の四面の獣口の動物)				池の北に 香醉山
世記經 (2世紀以前)	雪山の中	ガンガー (牛)	シンドゥ (獅子)	ヴァクシュ (馬)	シーター (象)	なし
起世經 (紀元後)	雪山の中	ガンガー (象)	シンドゥ (牛)	ヴァクシュ (馬)	シーター (獅子)	なし
仏説立世阿毘曇論 (2世紀以前)	無熱惱池とそこから流れ出る四大河についての記述なし					
阿毘達磨大毘婆沙論 (3世紀以前)	瞻部洲の中（或いは中央）	ガンガー (象)	シンドゥ (牛)	ヴァクシュ (馬)	シーター (獅子)	なし
大智度論 (2～3世紀)	瞻部洲の北辺 雪山の中	ガンガー (象)	シンドゥ (牛)	ヴァクシュ (馬)	シーター (獅子)	なし
瑜伽師地論 (4世紀前半)	雪山の近く？	ガンガー (不明)	シンドゥ (不明)	ヴァクシュ (不明)	シーター (不明)	なし
正法念處經 (4～5世紀)	無熱惱池とそこから流れ出る四大河についての記述なし					
大方広仏華嚴經 (4世紀半ば以前)	不明	ガンガー (象)	シンドゥ (牛)	ヴァクシュ (馬)	シーター (獅子)	なし
阿毘達磨俱舍論 (5世紀)	瞻部洲の中央より北 大雪山の北、香醉山の南	ガンガー (不明)	シンドゥ (不明)	ヴァクシュ (不明)	シーター (不明)	あり
阿毘達磨順正理論 (5世紀後半)	中印度より北 大雪山の北、香醉山の南	ガンガー (不明)	シンドゥ (不明)	ヴァクシュ (不明)	シーター (不明)	あり
大唐西域記 (7世紀)	瞻部洲の中央 香山の南、大雪山の北	ガンガー (牛)	シンドゥ (象)	ヴァクシュ (馬)	シーター (獅子)	あり
秘密曼荼羅十住心論 (9世紀)	中印土より北 雪山の北、香醉山の南	ガンガー (牛)	シンドゥ (象)	ヴァクシュ (馬)	シーター (獅子)	あり

注 16) の文献をもとに作成。

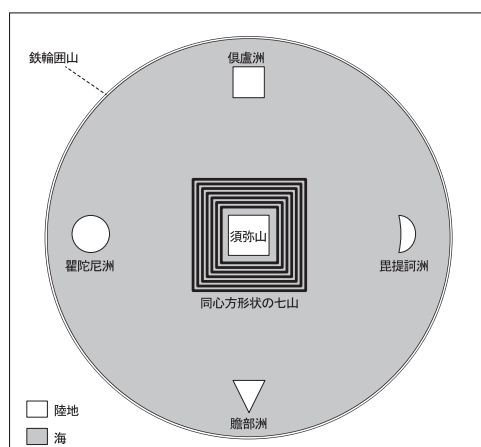
る動物であった四獣（獅子、象、馬、牛）と、インド古来の四河説の結合によって成立した可能性が高いとしている。さらに、仏教とヒンドゥー教の対立を背景として、ヒンドゥー教のシヴァ神の乗物とされる牛が、仏教では四獣から除外された例も、朴は挙げている。牛の代替に、観音信仰の盛んなチベットにおいては、観音菩薩の本師（根本の導師）にあたる阿弥陀如来の乗物であった孔雀が取り入れられたという。その説に従えば、カイラス山・マナサロワール湖周辺から流出する四大河の伝統的水源の動物（獅子、象、馬、孔雀）は、古代インドの聖なる動物であった四獣（獅子、象、馬、牛）のチベットの變容とも捉えられる。

III. 西チベットの山河と須弥山世界の関連性

1. 仏典の須弥山世界の描写

須弥山世界とは、古のインド人が考えた世界（命あるものが生存する空間）の姿である。世界の中心に須弥山（サンスクリット語「スメール（Sumeru）」の音写、「メール（Meru）」ともいう）という巨大な山がそびえる世界像で、仏教やヒンドゥー教、ジャイナ教に幾つもの類型が認められる¹⁸⁾。

仏教の須弥山世界は、須弥山を中心とし、鉄輪圀山てつりんちせんに囲まれた円形の世界である。本稿では、仏典に説かれた須弥山世界のうち、『阿毘達磨俱舍論』（略して俱舍論）の須弥山世界を参照して、西チベットの山河（カイラス山・マナサロワール湖とその周辺から流出する四大河）との関連性を検討する。俱舍論は5世紀頃にインドで著された仏教論書で、仏教の世界像は俱舍論をもって一応の完成に達



第14図 『阿毘達磨俱舍論』の須弥山世界（全体）
定方晟（2011）『インド宇宙論大全』、春秋社、209頁、図18を加筆修正して作成。

し、後世の学徒がこれに準拠したという¹⁹⁾。また、IV章で触れるチベット仏教の巡礼案内書においても、俱舍論の記述が仏教徒の伝統的な説として挙げられている。

俱舍論の須弥山世界は、同心方形の七山が須弥山を囲み、七山の外側に四大陸（瞻部洲せんぶしゅう、閼提訶洲びだいかしゅう、閼提尼洲くたにしゅう、俱盧洲くるしゅう）が位置する（第14図）。南方の瞻部洲は北が広く南が狭い逆台形で、洲の中央から北へ向かうと、三箇所には三重の黒山がある。その北には大雪山があり、大雪山の北には香醉山がある。大雪山の北、香醉山の南に無熱惱池があり、池から四大河（ガンガー、シンドゥ、シーター、ヴァクシュ）が流れ出る（第6図）²⁰⁾。

2. 瞻部洲内部の描写と西チベットの山河の照合

（1）構図の相似、四大河の名称の不一致

俱舍論の須弥山世界の瞻部洲を図化した第6図と、西チベットの山河およびインド亜大陸の地理的位置関係を示す第5図を比較すると、逆台形の瞻部洲はインド亜大陸、大陸北部の

大雪山はヒマラヤに相当する。「大雪山」は「マハーヒマーラヤギリ (Mahāhimālayagiri)」の漢訳であり²¹⁾、名称からも、インド亜大陸の北辺に雪を戴いて横たわるヒマラヤの反映であることが窺える。大雪山の北側では、香醉山の南に無熱惱池があり、池から四大河が流れ出る。これも、ヒマラヤ北側のカイラス山・マナサロワール湖周辺からインド亜大陸を潤す四大河が流出する地理的位置関係を想起させる。

ただし、無熱惱池から流れ出る四大河（ガンガー、シンドゥ、シーター、ヴァクシュ）の名称は、必ずしもカイラス山・マナサロワール湖周辺から流出する四大河（インダス川、サトレジ川、カルナリ川、ブラマプトラ川）を示すものではない。無熱惱池から流れ出る四大河のうち、「ガンガー (Gaṅgā)」はガンジス川、「シンドゥ (Sindhu)」はインダス川のサンスクリット語名で、インド亜大陸の代表的な大河である。インダス川はカイラス山の北東から流出し、ガンジス川もその主要な支流カルナリ川がマナサロワール湖の南西から流出する（第2図）。また、ガンジス川の主源流（バーギラティー川）もヒマラヤ主稜線の南側ながら西チベットに隣接する。しかし、「シーター (Śītā)」はヤルカンド川ないしシルダリヤ川²²⁾、「ヴァクシュ (Vakṣu)」はアムダリヤ川²³⁾を示す名称とされ、いずれも中央アジア方面の大河である（第1図）。インド亜大陸と西チベットの山河を反映したようにみえる瞻部洲内部の構図において、無熱惱池から流れ出る四大河の名称に中央アジア方面の大河が含まれるのである。

（2）四大河の名称に中央アジアの大河が含まれた要因

「無熱惱池から四大河が流れ出る」という

構図は、中東から中国にかけて存在した四河説のインド版であると考えられる。四河説は「聖なる場所（神の都や楽園）から四河が流れ出る」という概念で、インドの須弥山世界のほか、エデンの伝承²⁴⁾や中国古代の崑崙説話²⁵⁾にも認められる。古代インドの仏教徒が、四河説に自らの地理認識を反映させた世界像を創り上げた結果、インド亜大陸のガンガーとシンドゥ、中央アジア方面のシーターとヴァクシュによる四大河が成立したと考えられる。そこには、1～3世紀頃に中央アジア～イラン高原東部（現在のアフガニスタン付近）～北インドを支配したクシャーナ朝の版図、その時代にガンダーラ（現在のパキスタン北西部ペシャワール周辺）からイラン高原東部や中央アジアに広まった大乘仏教の伝播ルート、それ以前からの文化的・経済的な交流等の影響が窺える²⁶⁾。また、紀元前1500年頃以降にインダス川流域に進出し、その後ガンジス川流域へと移住したアーリア人は、もとは中央アジアの牧畜民であった。したがって、古代インド人の地理認識という点からみれば、四つの大河に中央アジア方面の大河が含まれるのも不思議ではない。

いずれにしても、「無熱惱池から四大河が流れ出る」という仏典の須弥山世界の構図は、カイラス山・マナサロワール湖周辺から流出する四大河をそのまま取り入れたものではなく、インド亜大陸から中央アジアまで及ぶ、より広い地理認識に基づいたものと考えられる。そのようにして成立した世界像によく合致する地理的位置関係（カイラス山・マナサロワール湖周辺から四大河が流出する）が西チベットに実在した。そこで、無熱惱池の北に香醉山を置いてマナサロワール湖北方のカイラス山を想起させ、大雪山以北の構図を西

チベットの山河の地理的位置関係に合わせたのが、俱舎論の須弥山世界なのであろう（第5・6図参照）。俱舎論よりも成立の古い仏典の須弥山世界では、無熱惱池の北に香醉山が配置された構図はみられないのである（第1表）。このような仏典の須弥山世界の成立・発展過程については、稿を改めて検討したい。

IV. チベット人の宗教的な地理観で捉えた四大河の伝統的水源

1. チベット仏教の巡礼案内書“Ti se gnas bshad”の記述

巡礼案内書とは、巡礼の対象となる聖地の歴史や伝承、巡礼路上の聖なる地点等が記された書のことである。そこには、聖地とされる山や湖、大河の水源地をどのような姿で認識するのかという、宗教的な地理観も示されていると考えられる。

チベット仏教ディクン・カギュ派のテンジン・チューキ・ロドゥ（bsTan-'dzin Chos-kyi Blo-gros）が1896年に著した巡礼案内書“Ti se gnas bshad”²⁷⁾は、全7章のうち第6章と第7章がカイラス・マナサロワール巡礼の実用的なマニュアルとなっている。筆者は、同書の第6章と第7章を英訳したHuber and Rigzin²⁸⁾に目を通した。すると、第7章のマナサロワール湖およびカイラス山・マナサロワール湖周辺から流出する四大河に関する記述において、仏典の須弥山世界の影響が認められた。そこで、以下に該当部分の要約を示す。

「湖の形態は、真実の姿と目に見える姿の双方がある。まず、真実の姿については、『阿毘達磨俱舎論』で述べられているような伝統的な仏教徒の説が挙げられる。それによると、

無熱惱池の大きさは縦横 50 ヨーリで、そこからガンガー、シンドゥ、シーター、ヴァクシュの四つの川が流れ出る。

次に、目に見える姿は、聖人と俗人の二通りある。出世間的な智慧に目覚めた聖人に見える姿は、今でも仏典に説かれた特質をすべて備えている。いっぽう、業にとらわれた俗人に見える姿は、マパムという名の湖である。

四大河の流出に関しては、ガンガーは最初に湖の東側から流れ出る。しかし、そのあと湖の真ん中を通り抜け、象に似たドルチュという名の山の口から湧き出て、グゲの高地を西方へ流れる。シンドゥは湖の北側から南方へ流れ、ランカプランの谷の孔雀に似た山の口から湧き出て、ネパールからインドの中央を貫流する。ヴァクシュは湖の西側から東方へ流れ、チェマユンドゥンの馬に似た山の口から湧き出て、チベットのツァン地方、ウ地方、コンポ地方を横断して流れる。シーターは湖の南側から北方へ流れ、カイラス山の北の獅子に似た山の口から湧き出て、ラダックやバルティスタンを経て流れる²⁹⁾。」

2. 宗教的な地理観に認められる須弥山世界の影響

(1) カイラス山・マナサロワール湖周辺から流出する四大河と無熱惱池から流れ出る四大河の渾然一体化

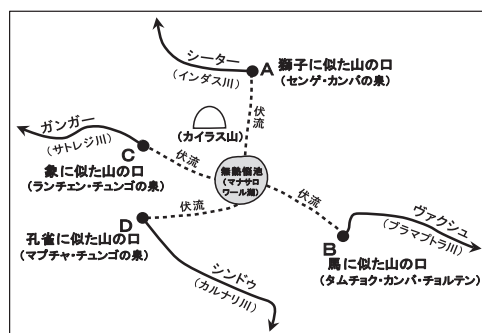
上記の要約文によると、その湖は、俗人の目にはマパムという名の湖として映る。「マパム（ma pham）」は「征服されない」という意味で、マナサロワール湖のチベット名である。いっぽう、聖人の目には、仏典に説かれた特質をすべて備えた姿に映るという。つまり、聖人に見えるのは、仏典の説（俱舎論の記述）に示される真実の姿であり、真実の姿では、その湖は無熱惱池である。そして、

俱舎論で説かれるように、湖からガンガー、シンドゥ、シーター、ヴァクシュの四大河が流れ出る。ただし、各大河は湖を流れ出てから地上に湧き出る口までは地下を流れるようである。しかも、地上に湧き出る口とそこからの流路は、カイラス山・マナサロワール湖周辺から流出する四大河（インダス川、サトレジ川、カルナリ川、ブラマプトラ川）の伝統的な水源と流路（Ⅱ章1～4節、第1・2図参照）に一致する。

順に確認すると、要約文のガンガーは、象に似たドゥルチュという名の山の口から湧き出てグゲをとおり、西へ流れるという。これは、ドゥルチュ・ゴンパ僧院そばのランチェン・チュンゴ（象の川の水源）の泉から湧出し、グゲ遺跡付近をかすめて西へ流れるサトレジ川（チベット名：ランチェン・ツァンポ川）である。要約文のシンドゥは、孔雀に似た山の口から湧き出て、ネパールさらにはインド中央部へ流れるという。これは、マプチャ・チュンゴ（孔雀の川の水源）の泉から湧出してネパール西部を流れ、インドに入ってガンジス川に合流するカルナリ川（チベット名：マブ・チュ川）である。要約文のヴァクシュは、チェマユンドゥンの馬に似た山の口から湧き出て、チベットのツァン地方、ウ地方、コンボ地方を横断するという。これは、タムチョク・カンバ（天上の馬の口あるいは馬の耳から流れ出る）のチョルテンそばの泉から湧出し、ツァン（中央チベットのシガツェ地方）、ウ（中央チベットのラサ地方）、コンボ（ラサ東方ナムチャバルワ山付近）を横断するブラマプトラ川（チベット名：ヤルン・ツァンポ川、主源流の名称はチェマユンドゥン・チュ川）である。要約文のシーターは、カイラス山の北の獅子に似た山の口から湧き

出て、ラダックやバルティスタンを流れるという。これは、センゲ・カンバ（獅子の口から流れ出る）の泉から湧出し、ラダックさらにはバルティスタン（ラダック北西）へ流れるインダス川（チベット名：センゲ・ツァンポ川）である。

以上のように、要約文では、カイラス山・マナサロワール湖周辺から流出する四大河（インダス川、サトレジ川、カルナリ川、ブラマプトラ川）について、その伝統的な水源と流路を述べている。しかし、各大河の名称は、俱舎論の無熱惱池から流れ出る四大河（ガンガー、シンドゥ、シーター、ヴァクシュ）の名称である。そして、俱舎論の四大河が無熱惱池から流れ出るのと同様に、要約文で述べられる四大河も湖から流れ出る。ただし、最初は湖から地下を伏流し、それぞれの伝統的な水源に該当する象・孔雀・馬・獅子に似た山の口で地上に湧き出るという。つまり、ここではマナサロワール湖と無熱惱池が同一視され、カイラス山・マナサロワール湖周辺から流出する四大河と、無熱惱池から流れ出る四大河も、渾然一体となっているのである（第15図）。



第15図 チベット人の宗教的な地理観で捉えた四大河の伝統的な水源（“Ti se gnas bshad” 第7章の記述）

本図の●A～Dは第2図の☆A～Dに対応する。

(2) 渾然一体化の背景

チベット人やチベット仏教僧侶との交流から得られた印象、文献の指摘等に基づき、渾然一体化の背景は以下のように考えられる。

人々の宗教心の喚起には、観念的な説得よりも雰囲気醸成が必要で、そのためには現実に即した叙景的・地理的な説明が有効であるという³⁰⁾。インド発祥の仏教がアジア各地に浸透していく過程においても、仏典に示された世界を各地の自然環境に重ね合わせて説明することが不可欠であった³¹⁾。また、チベット仏教サキャ派僧侶クンガ・テンパ氏によれば、一般的な傾向として、チベット人は神話や仏典の説、高僧の言を真実として受容するという。筆者もチベット文化圏滞在中に同様の印象を受けることが少なからずあった。したがって、俱舎論の内容は真実であり、そこに描かれた須弥山世界も、我々人間が生きる世界の真実の姿を説いていることになるだろう。これらを踏まえると、西チベットの山河に重ね合わされる仏典の須弥山世界の描写は、西チベットの山河の真実の姿ということになる。“Ti se gnas bshad” 第7章のマナサロワール湖およびカイラス山・マナサロワール湖周辺から流出する四大河に関する記述は、こうした宗教的な地理観に基づいていると考えられる。その根底には、万物には真諦しんたい（出世間的な智慧に目覚めた人の見方ないし真理）と俗諦ぞくたい（世俗の見方ないし真理）の両面があるという、仏教の真俗二諦しんぞくにたいの概念が影響しているのだろう³²⁾。

それゆえ、“Ti se gnas bshad” 第7章の記述では、巡礼者が目の当たりにするマナサロワール湖は、あくまでも俗人に見える世俗的な姿であり、湖の真実の姿は俱舎論にも説かれた無熱惱池であるとされた。カイラス山・

マナサロワール湖周辺から流出する四大河（インダス川、サトレジ川、カルナリ川、ブラマプトラ川）も、真実の姿は無熱惱池から流れ出る四大河（ガンガー、シンドゥ、シーター、ヴァクシュ）ということになる。しかし、俗人に見える四大河はマナサロワール湖から流れ出るのではなく、それぞれの伝統的な水源とされる泉から湧出する（第2図、図中の☆A～D）。そこで、四大河は湖から流れ出て、地上に湧き出る口までは地下を伏流することになったのだろう。また、各水源の泉は、仏典に説かれる無熱惱池の四面の獣口（獅子、象、馬、牛）と同様に、動物の口に喩えられた。ただし、古代インドの聖なる動物であった四獣のうち、シヴァ神の乗物とされる牛が除外されて阿弥陀如来の乗物であった孔雀が取り入れられ、チベットの変容を果たしたようにみえる（Ⅱ章5節(2)項参照）。

チベット人の宗教的な地理観においては、カイラス山・マナサロワール湖周辺から流出する四大河の伝統的水源は、無熱惱池（俗人に見える姿ではマナサロワール湖）から流れ出た四大河が地上に湧き出る地点であり、世俗的な姿としての水源であるといえる。

V. おわりに

本稿では、カイラス山・マナサロワール湖周辺から流出する四大河の伝統的水源の実相を明らかにするため、実際に訪れてみた水源のロケーションと、当該地点に認められる宗教的な意味づけの両面から検討した。

カイラス山・マナサロワール湖周辺から流出する四大河の伝統的水源は、チベット人の宗教的な地理観においては、真実である仏典の須弥山世界の描写（無熱惱池から流れ出る

四大河)に整合するような様相で認識された。具体的には、無熱惱池(俗人に見える姿ではマナサロワール湖)から流れ出た四大河が地上に湧き出る地点であり、世俗的な姿の水源として捉えられた。そのような宗教的な意味づけの拠りどころとなったのは、大河の源として誰もが納得するようなロケーションが醸し出す佇まいであり、そこに聖性を感じ取った巡礼者や西チベットで生きる人たちの感性であろう。四大河の伝統的水源は、現代の国際的な基準(最長、最大流量、最奥地点等)では、いずれもその大河の水源には該当しない。しかし、澄みきった水がこんこんと湧出する様相は、清浄感と生命力に溢れ、大河の源としてまさに相応しい佇まいであることは、Ⅱ章で報告した通りである。

身のまわりの自然環境との接し方や信仰のあり方、文化的背景等により、民族間や宗教間、あるいは個人の間でも、地理認識は必ずしも一致するとは限らない。したがって、大河の「水源」の概念も一様ではなく、外部の人間による調査・測定によって選定される客観的な水源には、巡礼者や周辺地域の住民は関心を示さない。同じ場所に立ち、同じ景観を見たとしても、その景観に対する認識は様々である。他者の認識を理解することは難しい。それでも、聖地とされる山や湖、大河の水源に巡礼し、その存在感や佇まいを実感すれば、古来そこに聖性を見いだしてきた諸人との共通の原体験が成立する。こうした体験は、時間と空間の隔たりをこえて、各地域・各時代の多様な人文事象を考察するうえでプラスに作用すると考えられる。

〔付記〕立命館大学文学部地理学科在学中にゼミでご指導いただいた中野雅博先生が、2022年3月18日にご逝去されました。卒業後も、チベット・ヒマラヤ一帯の旅に明け暮れた元ゼミ生を、先生は折に触れて気にかけてくださいました。ここに心より御礼申し上げますとともに、本稿を中野雅博先生に捧げます。

注

- 1) ① John Snelling (1983) *The Sacred Mountain*. East West Publications, pp. 15-44. ② Andrea Loseries-Leick (1998) On the Sacredness of Mount Kailasa in the Indian and Tibetan Sources, in Alex McKay ed. *Pilgrimage in Tibet*. Curzon Press, 143-164. ③ C・アレン(宮持優訳)(1988)『チベットの山』、未来社、15-33頁。④宮本久義(1994)「聖地カイラス巡礼の宗教的背景と実態」、東洋研究、111、1-23。
- 2) 河口慧海(1978)『チベット旅行記(二)』、講談社学術文庫、26頁。
- 3) 密教の修法のための図像。本尊を中心として、諸尊が定められた方式に従って配置され、仏の悟りの世界をあらわす。行者はマンダラを観想し、マンダラがあらわす世界と自己の同一性を感得した。
- 4) 金剛界マンダラは、^{こんごうぎょうぎょう}『金剛頂経』の説により、大日如来の智慧の働きとそれに基づく悟りの世界を図像化したもの。小林暢善『曼荼羅のおしえ一祈りと悟りの造形に学ぶ一』、真言宗泉涌寺派大本山浄土寺のウェブサイト内(<http://www.ermjp.com/j/temple/mandara/manda/oshie/oshie.html>)。2022年5月2日閲覧。
- 5) 5世紀頃、ヴァスバンドゥ(^{せしん}漢訳名:世親)によって著された仏教論書。後に中国語やチベット語にも翻訳され、仏教の基礎教理として重用された。
- 6) 巡礼の対象となる聖地の歴史や伝承、巡礼路上の聖なる地点等が記された書。
- 7) Swami Pranavānanda (1950) *Exploration in Tibet*. University of Calcutta, p. 199.
- 8) Swami Pranavānanda (1983) *Kailas-Manasarovar*. Swami Pranavānanda, p. 169.
- 9) ①前掲8)、p. 103. ②Sven Hedin (1999) *Trans-Himalaya Vol. II*. Asian Educational Services, p. 182.
- 10) 「ゴームク(Gaumukh)」は、サンスクリット語で「牛の口」の意味。
- 11) 前掲8)、p. 137.
- 12) 中村保(2001)「メコン川(瀾滄江)水源問題を検証する 付記 メコン源流の山々」、山

- 岳、154、159 頁。
- 13) 久保田展弘 (1991) 『インド聖地巡礼』、新潮選書、25 頁。
- 14) 7 世紀末～8 世紀初頭頃、南インドで成立したとされる。金剛界マンダラ建立の儀則や弟子をマンダラに導入する方法等が説かれる。
- 15) 前掲 4) のウェブサイト、3 章 (3) 節 b 項「成身会の構造 (金剛界五仏と五智)」参照。なお、伝統的水源の動物と金剛界五仏の乗物の合致については、最初にタンカ絵師の西洋児氏からヒントをいただいた。
- 16) ① Ataru Sotomura (2011) *Mt. Sumeru 須彌山: Source Manual for Iconographic Research on the Buddhist Universe (Nalanda-Sriwijaya Centre Working Paper Series No. 6)*. Nalanda-Sriwijaya Centre. ②外村中 (2016) 「須彌山世界に関する諸説と東大寺大仏蓮弁須彌山図について」、稲本泰生編『東アジア仏教美術における聖地表象の諸様態』、稲本泰生、1-32。③ SAT 大正新脩大藏經テキストデータベース 2018 版 <http://21dzk.l.u-tokyo.ac.jp/SAT2018/master30.php> 2022 年 8 月 9 日閲覧。④玄奘 (水谷真成訳) (1971) 『大唐西域記 (中国古典文学大系 22)』、平凡社、8 頁。
- 17) 朴亨國 (2012) 「四獣頭 (四獣、四聖獣) の形成と伝播について」、密教図像、31、64-82。なお、「四河説」は「聖なる場所 (神の都や楽園) から四河が流れ出る」という概念で、Ⅲ章 2 節 (2) 項において触れる。
- 18) 定方晟 (2011) 『インド宇宙論大全』、春秋社。
- 19) 松山俊太郎 (1976) 「古代インド人の宇宙像 Ⅲ」、エピステーメー、2-10、167 頁。
- 20) ①西義雄訳 (1989) 『国訳一切経印度撰述部毘曇部二十六上』、大東出版社。②平川彰編 (2001) 『真諦訳対校 阿毘達磨俱舍論 第三卷』、山喜房佛書林。
- 21) 前掲 20) ①、473 頁。
- 22) シーターは、シルダリヤ川と同一視されていたが、唐の西域への勢力拡大の影響により、のちにヤルカンド川と同一視されるようになったという。Miyamoto Shoson (1967) *The Geographical Expansion of the Indian Cultural Sphere Symbolized by the Metaphor of the Five Rivers of India and the Metaphor of the Four Rivers of Asia*, 印度學佛教學研究、16(1)、474-460。
- 23) アムダリヤ川の上流 (第 1 図、タフティ・サンギン遺跡付近の合流点から左俣) は、現在も「Vakhsh (ヴァクシュ)」と呼ばれる。世界航空地形図 TPC-G6B (縮尺 1/50 万) 参照。
- 24) ユダヤ教とキリスト教の正典『旧約聖書』の「創世記」によれば、エデンの園に四つの川 (ピション、ギホン、ビデケル (ティグリス)、ユーフラテス) が源を発している。中沢治樹訳 (2004) 『旧約聖書 (中公クラシックス W39)』、中央公論新社、8 頁。
- 25) 中国古代の地理書『山海経』によると、崑崙山から河水 (黄河) を含む四水が流れ出る。海野一隆 (2004) 『東洋地理学史研究 大陸篇』、清文堂出版、32-34 頁。
- 26) Frits Staal (1990) *The Lake of the Yaksha Chief, in Tadeusz Skorupski ed. Indo-Tibetan Studies: Papers in honour and appreciation of Professor David L. Snellgrove's contribution to Indo-Tibetan Studies (Buddhica Britannica; Series continua II)*. The Institute of Buddhist Studies, 275-291.
- 27) “Ti se gnas bshad” は通称であり、「ティセ (カイラス山) の案内書」という意味。詳細は後掲 28)、pp. 126-128. を参照。
- 28) Toni Huber and Tsepa Rigzin (1999) *A Tibetan Guide for Pilgrimage to Ti-se (Mount Kailas) and mTso Ma-pham (Lake Manasarovar)*, in Toni Huber ed. *Sacred Spaces and Powerful Places in Tibetan Culture*. Library of Tibetan Works and Archives, 125-153.
- 29) 前掲 28)、pp. 140-143.
- 30) 岩本裕 (1965) 『極楽と地獄』、三一書房、104-105 頁。
- 31) 別所裕介 (2017) 「聖地を切り売りする人々—現代チベットの経済開発と民衆の信仰空間の特性—」、宗教研究、91-2、204 頁。
- 32) 仏教の世界観 (世界をどのように意味づけ、いかなる見方をしているのか) には二つの考え方があるという。一つは、仏へと近づく (天へ高まっていく) ことを踏まえ、段階的な階層の世界を想定する考え方。もう一つは、同じ一つの世界が真諦と俗諦では異なって受け取られるという二諦の考え方である。蘭田坦 (2011) 「仏教の世界観について」、仁愛大学研究紀要 人間学部篇、10、6-9 頁。